

第2章 共に生きる

一地域とつながり、世界とまじわろう一

第1節 (教材2-1) こんなところにこんな

バリア (障壁) が…

～体験的にバリアフリーを学ぶ～

ねらい

障害者に対する偏見や差別をなくすためには、まず障害者や障害に対する正しい理解と認識を深めることが必要です。次のような実体験を通し、心と社会のバリアフリーやノーマライゼーション化を進めるにあたっての課題を学び合ひましょう。

展開の仕方

1 アイマスク体験

- (1) 2名のペアで行う。校内見取り図を用意する。介助者は校内を5分程度で回れる道順を考え体験者を案内する。
- (2) 1周したら介助者、体験者は交代して校内を回る。
- (3) お互いに道順を示し合いどのような感想を持ったか話し合う。

2 車椅子体験

- (1) 4名のグループで行う。体育館にすのこ板などの障害物を適当に配置する。
- (2) 一人で乗り越せないすのこ板はどうするか、他の3名が介助の仕方を考えながら車椅子を移動させる。全員が体験する。
- (3) 感想を話し合う。特に介助の仕方ですぐに困ったこと、体験者として安心して介助が受けられるかに視点を当てる。

留意点

地元の社会福祉協議会や校内ボランティア等と連携し、適切な介助の仕方を学ぶ。

発 展

- 1 校外に出て実施する。障害のある人が安心して行動できる学校、地域社会のあり方について、障害者も交え体験交流や話し合いをする。
- 2 食器なども包帯で指が使えないように固定して使用してみる。
- 3 言葉を使わずに自分の意思を伝えるコミュニケーション活動を実施し、聴覚障害者の立場を理解し、手話などについて考える機会とする。

※ノーマライゼーション※バリアフリー (「人権教育の…県行動計画 P.19、20) 参照

※県内のボランティア・NPOなどの紹介については、「ワンステップー長野県市民活動団体」(川辺書林 1999年) 参照

こんなところに、こんな工夫 —バリアフリーを学ぶ (教材2-1)

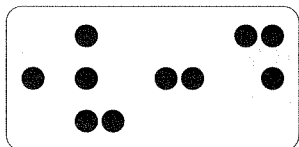
障害者の自立や社会参加の妨げとなっている物理的な障壁等をなくし、だれにでもやさしく安全で快適な福祉の町作りや環境整備が求められています。

どうしてこうなっているのでしょうか？

①～⑤に答えましょう。(答えは次のページにあります)

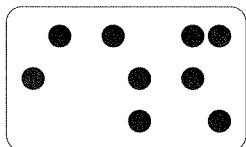
①～③：点字を読みましょう。(点字判読表は各校常備の「文書事務の手引」平成8年3月発行 p.262～264参照)

① ビールのプルタブ側にあります。



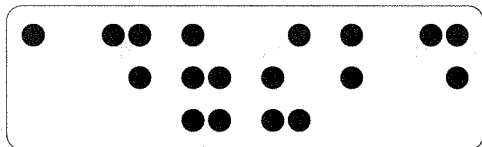
()

② チューハイのプルタブ側にあります。



()

③ 家庭用アルミ箔にあります。

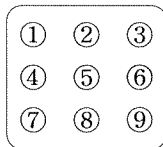


()

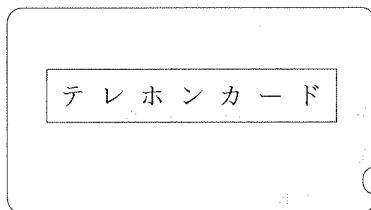


公衆電話機に関するもの

④ プッシュボタン5の突起はなんのため？ ⑤ テレホンカードの切り込みの機能は？
(1つまたは2つの切り込み)



()



()

【なぜ、ビールや公衆電話、エレベーターなどにこのような工夫がされているのか話し合ってみよう】

【手話で自己紹介をしましょう。〈私の名前は〇〇です。よろしくお願いします〉】

はじめまして



わたし



わたしは自分のことなので、右手の人差し指で自分の胸をさす。鼻先をさして表現する場合もあるが、唇の動きが相手に見えなくなるので注意する。

名前



左の手のひらを相手に向けて立てる。右手は顔の真ん中を指し、顔の真ん中を手のひらに押し当てる。名前の下に押印する唇の直列状に由来する。

よい



右手でこよしをつくり、鼻に当て少し押し出す。同意、賞賛「よろしくおめでとうございます」というときなどに使う。右手を上方へ動かすと「鼻が高い」の意味になる。

頼む



右手刀を、顔の正面から下へおろす。「よろしく頼む」「～してください」「お願いします」などは基本的にこの表現となり、顔の表情や手の位置で変え分ける。

【イラストでわかるやさしい手話（新星出版社）より】

※ 1 バリアフリーに関するインターネット関連

- ① バリアフリー協会 (<http://www.bfa.gr.jp>)
- ② ハローねっと・ぼらんていあ (<http://www.wnn.or.jp/wnn-v>)

※ 2 公衆電話機でのバリアフリーの取り組み（一例）

西暦年	取 り 組 み 内 容	バリア
1900	日本初の公衆電話サービス開始	
1975	手動式車椅子用公衆電話ボックスの導入 プッシュ式公衆電話機の導入	車椅子
1982	テレホンカードとカード式公衆電話機の導入 ダイヤル数字の5のポッチ	目
1985	テレホンカードに切り込みを採用	目
1986	ダイヤルの大きさ、間隔、形を改善	手指
1988	テレホンカードと硬貨の投入口を点字で表示	目
1991	デジタル公衆電話に「めいりょう」と外部端子整備	耳、口
1993	電動車椅子用公衆電話ボックス導入	車椅子

答え：①（びーる）②（おさけ）③（あるみほいる）④（番号などの配列がわかる）
⑤（カードの裏表、左右、度数がわかる）

【参考】バリアフリー商品の情報は、「バリアフリーガイドブック 日本経済新聞社」などで参照

公開授業を巡った中学

校と高等学校の連携

体験した 共生の感覚

同和教育研究指定校木曽高校の実践

木曽高等学校では、二年間業が始まる前から、一年三組の同和教育研究指定校の研究発表も兼ねて、第十通学区中高連絡協議会の一環として、中高の先生方に授業を公開しました。

参加した先生方からは、「真剣に取り組んでいる生徒の皆さんの姿が印象的でした」

「高校の授業を参観できたこと」「危険もあるのですが、お互いにカバーし合うこと」「もしも

の成長した姿を見ると、連絡するても良い機会、このようアップ態勢も説明して、安心して授業に集中できる環境も整えてありました。

わずかな傾斜も大変だといっただけと思いきや、高等

生看護科の研究室から車椅子の同和教育を借りてきました。最初に障害者の役をするS君が、廊下

に對して、「腰を下ろします。S君、乗せてあげよう」と言って、脇を抱える者と足を担う者とに分かれて持ち上げます。「あ、重い」



手探りでおそろおそろ／

S君は、自分が車椅子を動かさそうとしますが、右、左と旋回してしまいます。そこで介護の三人が代わる代わる押して、進ませます。昇降口から外へ降りる段差は二十センチありません。そこには手製のスロープが用意されています。しかし、S君は降りていくときのスピードに悲鳴を上げています。

ここで、Tさんと交替。今度は、このスロープを登って行かなくてはなりません。まず、単独でアタック。スロープの三分の一くらいしか登っていきません。手を放せば、後ろ向きで下ってしまいます。「助けて、押して」の合図で友人に押ししてもらい、やっと昇降口に登ることができました。

「さて、どう登ったものだろうか」杖を先に出してみます。どう力を入れても、上の段まで登ることができません。たった十五センチぐらいの一段を跳び上がるようにすると、バランスを失って、下に倒れそうになります。試行錯誤の末、「登りは杖よりも足が先」ということを学習できました。

同じように「下りは杖が先」ということを学びました。でも、杖を一段先につき、足をそこに降ろそうとするときは、杖で

けで体を支えることになりました。足がそこで止まるのか、階段を転がり落ちるのではないかと不安にとらわれてしまいます。

生徒たちは、杖に懸命にすがっている人をガイドしてあげることが、安心感を高めることを学びました。

不安が不安を呼ぶ。アイマスクの体験班は、不安との闘いです。住み慣れた学校でも、また友達が近くにいてくれている、真つ暗の中を手探りで進むよりはあります。階段に手すりがあったので助かった。「友達の声や手だけが頼りなので、声をかけたなり、誘導をしっかりとやる」等と話しています。

体験学習を終えて教室に戻り、話し合いになりました。それぞれの感想や意見を発表します。「三つとも簡単そうに見えるが大変だということがある」「駅などで、障害のある人に出会ったら、声をかけ親身になって手伝いたい」などの意見が続きます。それらの意見を聞いた後、Y先生が指摘したことは、生徒の意識のあり方です。

「身体に障害があるから手助けするというのではなく、手をさしのべ合せて、共に生きるという自然な感覚をもつて行動することが大切ではないか」とまとめました。

体験学習と同和教育について研究協議会で、研究主任のY先生から、研究の柱が説明されました。体験学習によって、障害のある人に優しい社会づくりや生徒の人権感覚を磨こうとしたこと、全定併設校の立場を踏まえて定時制の生徒の厳しい生活条件の中で勉強に頑張っている作文を読んで、その真剣な姿から学ぶことが多かったこと、部落差別の現実を学ぶ話し合いによって認識を新たにしたこと等の取り組みの説明がありました。

中高の連携という点では、参加の先生方から、「同和教育の取り組みを公開していたので、大変参考になった」「生徒を受容しているY先生の指導姿勢や学校の支援態勢に感動しました」「真剣にでき、だるうかと心配していたが、多くの生徒も真剣に障害のある人の気持ちになつて学習していた等の意見が出されました。木曽高校の実践から多くのものを学び、充実した一日になりました。

「あ、重い」